

「立ち上がる農山漁村」選定案概要書

取組分野：【IT】、【知的財産権】

1. 都道府県、市町村 熊本^{みなみあそむら}県南阿蘇村
2. 事業者名 南阿蘇村おあしす米生産組合
3. 取組みの名称 「米の産直」 - 都市との連携 “食から緑のエネルギーへ”
4. 取組概要等

概要

平成元年、JA青壮年部7名で、米の無農薬栽培を試験的に開始。平成3年、産直に取り組むため白水村おあしす米生産組合を設立（「おあしす」はおいしい・あんぜん・しんせん・すてきの頭文字）。平成17年、市町村合併により南阿蘇村おあしす米生産組合へ名称を変更。

おあしす米は店頭では販売せず、直接届けることで信頼関係を築いている。**米袋に農家名を明記、消費者の口に入るまでが農家の責任としている。**注文は予約制が基本で、毎月一回、農家ごとに精米直後の米を発送している。**モットーは「顔のみえるおつきあい」。**そのために「おあしす便り」を毎月発行、季節毎に手づくり農産物も同梱している。また、遠隔地の消費者にはホームページを活用、農家ごとに経営の様子や家族の素顔を知らせ、心理的距離を近めている。**新規顧客の獲得はインターネットが主体で、試食用として初回に限り5kgを半額で提供している。**平成3年にゼロからのスタートであったが、現在では約900名の顧客に82トンを生産している。平成11年には「おあしす米」の名称を商標登録している。

消費者との交流は「アイガモ田見学ツアー」と称して、水田の見学やバーベキュー大会を実施、毎年約150名の参加がある。遠方の顧客へはこちらから出向き、直接対話することで信頼関係を深めている。

組織の運営は、精米施設・資材類・事務機器等は共同で購入、運営費は米袋の使用量に応じて構成員から徴収している。全員パソコンが使い、顧客管理や伝票の印刷なども個々の農家で行い、顧客とのやり取りや組織内の連絡はメールで行っている。顧客管理システムやホームページは自作し、事務経費の軽減を行っている。

米産直のノウハウを活用し、米以外に施設果物や野菜などの産直も手がけ、オリジナル地酒「一心行」を製造販売、また、規格外のホームランメロンを「場外ホームランメロン」と名付けるなど、独自ブランドを築いている。婦人部による手づくり石鹸配布も定期的に行っている。

活動の規模

項目	H13	H14	H15	H16	H17
生産量	68,997	73,699	76,641	79,562	81,325
解説	単位：t				
売り上げ	45,187	48,225	50,258	52,355	54,106
解説	単位：千円 米のみの販売額				
来客数	676	721	766	811	897
解説	単位：人 年間契約の顧客数				
イベント回数	2	2	1	1	1
解説	単位：回 消費者との交流会				
イベント参加者	約270	約165	約150	約150	約150
解説	単位：人 延べ人数				

活用している地域資源

標高500m前後の高冷地、冷涼な気候や昼夜の寒暖の差が安全でおいしい農産物を生産できる要因となっている。また、村内には全国名水百選の白川水源や、県名水百選に8つの水源が指定されるなど、豊富で清らかな地下水が無農薬栽培を可能にしている。

組合で製造している地酒「一心行」の名称は樹齢400余年になる大桜より名付けている。開花時期には約30万人が訪れている。「阿蘇は雄大で自然豊か」という知名度があり、また、町村合併後の名称を「村」としたために、「南阿蘇村産」と表示できることは貴重な財産と考えている。

地域活性化のポイント

安全な米づくりへの関心が高まり、平成9年にJAに減農薬米部会が設立された。また、構成員の働きかけにより学校給食に地元の米を使うようになった。

おあしす米の影響で直売に取り組む農家が増加し、産直のノウハウを蓄積することが出来た。また、当組合のホームページを参考に、観光農園やJA部会などのホームページ開設が急増した。

構成農家を中心に「パソコンクラブ」を発会、講習会等の普及活動を展開している。また、ネット利用者増により、村内に阿蘇テレワークセンター南阿蘇支局（プロバイダー）が開局された。構成員間での合併浄化槽率の高まりはもとより、集落排水事業や合併浄化槽助成事業が実施されるなど、水環境の整備が進んでいる。当組合は南阿蘇観光協会の一員であり、提案で第3セクター南阿蘇鉄道の沿線にナタネ種まきが実現している。

事業の今後の展開方向

技術水準を高めながら産直展開を進展させることで、構成員個々の農家経営の安定を図る。これまで行ってきた環境保全型農業を広範囲に広げ、自然環境を地域ぐるみで守るような活動を実践する。阿蘇の草原や田園風景は多くの地域住民で守るような活動を実践する。阿蘇の草原や田園風景は多くの地域住民の人力により維持されてきた。この景観を継承することが重要な課題と考えている。

農業農村は食料生産の場であるとともに、都市住民の癒しの空間でもある。食の交流やイベントを通じてこの機能が果たせるように、さらに充実した活動を展開する。

また、これからの農村はエネルギー生産の場でもあると考える。これまで食を通して都市と連携してきたが、今後はエネルギーをキーワードにした連携が出来ないかを模索したい。例えば、農村で菜の花を栽培、菜種油を都市部で使い、その廃食油をトラクターの燃料にするといった試みである。バイオマスの利活用にも活動の輪を広げたい。

幸いにして阿蘇は活動展開を可能にする要素を十分に備えている。地の利を活かした農業を展開し、夢と希望に満ちた地域づくりに邁進する。

